

一九九九年度

大学院

文学研究科  
中国研究科

博士・修士論文目錄

文学部 卒業論文目錄

文学会賞授賞卒業論文要旨

愛知大學文學會



一九九九年度大学院文学研究科中国研究科博士・修士論文目録

博士論文

文学研究科

日本文化専攻

丸DL六〇一 阮

毅 芥川龍之介研究——芥川龍之介と中国古典文学——

修士論文

文学研究科

日本文化専攻

丸ML〇〇四 高橋

賢 鎌倉幕府政治と鶴岡八幡宮寺の組織

丸ML〇〇二 坪内淳仁

尾張の喫茶文化形成に関する研究——主に津島市周辺の事例を中心に——

## 地域社会システム専攻

- 七ML〇七〇二 金子裕子 現代社会における高齢者の研究——ライフコース論の視点から——  
 七ML〇七〇六 馬芸 中国の産業化と学校教育の改革  
 九ML〇七〇五 平川雄一 三遠南信地域における県境を越えた地域形成

## 欧米文化専攻

- 七ML〇八〇二 塩田太郎 A Short History of Illustration in England  
 九ML〇八〇一 岩田芳和 —AGOTA KRISTOR 《LE GRAND CAHIER》の構造をみる—  
 九ML〇八〇三 治部英光 デカルトにおける人間の複合性について

## 中国研究科

## 中国研究専攻（文学会関係のみ）

- 九MLC〇五〇一 朝間礼子 花と中国文化  
 九MLC〇五〇二 石田卓生 東北地方近代文學の検討——古丁を中心として——  
 九MLC〇五〇九 西村博和 宋初における枢密院の変遷  
 九MLC〇五〇三 前田克彦 『現代漢語詞典』の方言語彙  
 九MLC〇五〇八 高橋めぐみ 中国語における複文分句の連接法

# 一九九九年文学部卒業論文目録

## 哲 学 科

### 東洋哲学専修

- 六P四〇一 飯場 久美子 荘子の思想について  
 六P四〇二 石部 真穂 白蓮教の研究  
 六P四〇三 板倉 正明 「赤眉の乱について」  
 六P四〇四 伊藤 開 『老子』の思想について  
 六P四〇五 今城 宗 興 仏教哲学中観における空について  
 六P四〇六 木下 智 広 老荘思想に見る東洋的人生観  
 六P四〇七 桐生 明 仁 『荘子』の研究  
 六P四〇八 小島 経 史 日本人の死生観  
 六P四〇九 櫻井 詩 子 漢詩よりみる中国人の友情について  
 六P四一〇 白井 由紀菜 バクテイについて  
 六P四一一 白石 恵 美 道教における「氣」の思想  
 六P四一二 杉浦 真 理 中国古典にみられる「笑い」について  
 六P四一三 丹下 佳 泰 秘密社会について  
 六P四一四 大門 良 一 古代中国における刑罰について

て

- 六P四一五 中村 奎 孔 『中国出土の書と思想』  
 六P四一六 平下 正 弘 理想の人間像  
 六P四一七 村上 洋 禅思想と老荘思想についての考察  
 六P四一八 毛利 太郎 老荘思想について  
 六P四一九 森 泰 一 『墨子私意』  
 六P四二〇 吉田 佳洋子 『韓非子』に見られる聖人像  
 六P四二一 吉田 浩 章 柳宗元の研究  
 六P四二二 渡辺 英 二 中国での鬼に対する考え方  
 六P四二三 板倉 幸太郎 隠逸思想について  
 六P四二四 西郷 なつみ 正始玄学と王弼易注の形而上学  
 六P四二五 門田 晃 一 現代日本と『論語』  
 六P四二六 三宅 大 輔 北周武帝と道教  
 六P四二七 佐藤 雅 史 『南総里見八犬伝』に見る日本人の儒教観  
 六P四二八 秋田 佳 美 ヘルクソンにおける過去の意味について

### 西洋哲学専修

雑P四二〇二 浅井明美 フツサル現象学における生

活世界について

雑P四二〇四 安藤純仁 終末論とハイデガー

雑P四二〇六 伊藤実紀 サルトルにおける自由と制約

について

雑P四二〇七 犬塚けい子 ハイデガーにおける本来的自

己について

雑P四二〇八 大黒八千代 スピノザにおける自由と決定

論

雑P四二〇九 岡田昌樹 ヘーゲルの「国家論」について

雑P四二一〇 加藤英樹 キルケゴールにおける「絶望」

の克服について

雑P四二一三 北原千春 デカルトにおける物体の存在

証明について

雑P四二一四 木場教二 ヴェイトゲンシュタインにおけ

る使用と規則について

雑P四二一五 栗田佑介 メルロ・ポンティにおける「パ

ロール」について

雑P四二一七 越野佐和子 プラトンとアリストテレスの

快楽論

雑P四二一八 境 亜矢 ソクラテスの善と快楽につい

て

雑P四二一九 品田純也 メルロ・ポンティにおける知

覚の問題について

雑P四二二〇 下平 歩 プラトンの初期対話篇におけ

る徳の統一性についての考察

雑P四二二三 杉浦 亜紀子 「国家」人間の本性と教育の有

効性について

雑P四二二三 杉浦 健一 「アアイテトス」編考察

雑P四二二三 杉江 康男 サルトルにおける無について

雑P四二三四 杉山 元章 パスカルの「背後の思想」に

ついて

雑P四二三五 高井 基登 デカルトにおける心身関係に

ついて

雑P四三〇 椽 尾 梨沙 「ハイデガーにおける現存在

の死の分析について」

雑P四三三 中川 貴博 ハイデガー「存在と時間」に

おける本来的自己の分析

雑P四三四 中武 哲郎 サルトルと他者問題について

雑P四三五 中村 圭 ホッブズの社会哲学について

の一考察

雑P四三六 中村 佳弘 プラトン「国家」における「三

つの比喩」の問題

雑P四三七 長谷川 智也 死への不安とハイデガー

雑P四三六 林 俊介 プラトン「ゴルギアス」篇に

おける政治学的問題について

- 六P四四〇 古田 義人 ソクラテスとストア哲学者  
 六P四四三 道山 修 ニーチェにおけるニヒリズム  
 について  
 六P四四四 森田 賢 ハイデガーにおける現存在の  
 本来性について  
 六P四四四 雪下 裕子 ヘルクソンにおける宗教の役  
 割について  
 六P四四九 鷲 晶子 アリストテレス「ニコマコス  
 倫理学」における最高善と中  
 庸について  
 六P四五二 渡邊 康子 ギリシア哲学における愛につ  
 いて  
 六P四五三 内藤 貴嗣 ニーチェにおける「ニヒリス  
 ムの克服」について  
 六P四五五 松井 千春 ヘルクソンにおける自由につ  
 いて  
 六P四五五 滝澤 優子 デカルトにおける夢と現実の  
 区別について  
 六P四五五 安藤 かおり ハイデガーの死について  
 六P四〇九 栗本 篤史 ギリシア哲学における狂気と  
 理性  
 六P四二〇 小林 太郎 クーンとポパーにおける科学  
 の進歩について

- 六P四二七 中野 宏一 ソクラテス初期対話篇におけ  
 る徳とは  
 六P四三三 松永 貴誓子 サルトルにおける他者の問題  
 について  
 六P四三六 和波 純子 ポリス社会におけるプラトンの  
 政治哲学の確立  
 六P四二六 近藤 哲矢 ニーチェの超人について  
 六P四二八 高川 照起 ハイデッガーの「死」について
- 社会学科
- 社会学専修  
 六S五〇一 浅野 美和 子どもの社会化課程と犯罪の  
 関係を考察する  
 六S五〇二 石山 陽子 母親が自分らしくあるため  
 に——生きがい探しの旅のなか  
 で——  
 六S五〇三 板倉 宣夫 高校野球についての社会学的  
 考察  
 六S五〇四 稲田 直子 家族にまつわる神話の研究  
 六S五〇五 牛山 丈裕 現代社会における教師と生徒  
 の関係についての考察  
 六S五〇六 白井 宏 日本におけるエスニックコ  
 ミュニティの形成と展開

- 雑S五〇七 大蔵 竜太 Jリーグとソシオ制度  
 雑S五〇〇 岡田 つぐみ 「世間」から考える日本社会の人間関係  
 雑S五〇二 甲斐 愛子 ストレスと癒し  
 雑S五〇三 加藤 久徳 「ゆたかな社会」の罪  
 雑S五〇五 佐々木 未知 学校教育の社会的機能と人間観について  
 雑S五〇六 篠原 旭幸 マス・メディアの公共性  
 雑S五〇七 清水 伸子 現代の離婚問題と中高年期の離婚  
 雑S五〇九 神野 昌宏 消費形態としての流行  
 雑S五〇〇 杉浦 晃子 外国人労働者問題から見る日本的集団主義  
 雑S五〇三 鈴木 良和 大企業による利潤追求と社会的存在性との関係について  
 雑S五〇三 高木 祐二 現代家族における父親の役割  
 雑S五〇四 田代 千香子 「学級崩壊」と教員の資質のあり方について——教師教育制度の改正過程をめぐって——  
 雑S五〇五 谷川 尚美 現代日本の若者について  
 雑S五〇六 寺澤 勝平 コミュニケーションブレイクダウン（情報化社会において体面の必要性と説得効果について）  
 雑S五〇七 富川 喜久子 脳死、臓器移植をめぐる問題とあり方——情報公開から考える——  
 雑S五〇八 鳥居 美里 学校教育における福祉教育  
 雑S五〇九 中山 実 児童虐待と若者世代の育児観  
 雑S五〇〇 橋場 崇 一般廃棄物のリサイクル活動の研究  
 雑S五〇三 秦 弓子 職場における女性の労働と諸問題  
 雑S五〇三 林 昌志 インターネットの社会的考察  
 雑S五〇三 前田 きよ子 「ストレス社会」と「癒し」ブームについて  
 雑S五〇四 松尾 佳代子 ファースト・インプレッション  
 雑S五〇五 水越 彩子 現代の悩める人間像——暴力について——  
 雑S五〇六 山谷 周子 死刑制度と人権  
 雑S五〇七 山田 尚人 地方都市におけるゴミ問題——四日市市を事例にして——  
 雑S五〇九 若松 雄一郎 超高齢社会に向けての生涯学習環境の必要性——高齢者の自立に向けての一考察——



雑S五〇四〇 和田悠子 家族における父親の役割

雑S五〇四一 賽漢卓娜 日本における国際結婚の現状と課題

雑S五〇四二 成寶景 在日韓国・朝鮮人の人権問題の現状と未来

雑S五〇四三 並松千登世 夫婦の性愛関係

雑S五〇四四 嵯峨愛子 日本人にとっての「おい」とは何か

雑S五〇四六 不破久美子 顔の社会的影響

雑S五〇四七 宮田葵 性同一性障害とジェンダー

雑S五〇四八 三浦景 「しつけ」をめぐる親と子

雑S五〇四九 井口雅美 学校教育からハミ出した子供達の将来を考える

雑S五〇四七 箕浦涉 消費社会における流行現象について

応用社会学専修

雑S五〇二一 安保信之介 同調行動と精神発達

雑S五〇三三 石井智美 サイレント・ペイビー

雑S五〇四四 伊勢友和 劣等感の心理

雑S五〇五五 市川安代 生活習慣と価値観のジェネレーション・ギャップ

雑S五〇六六 伊藤恭豊 PM論からみた日本企業のリーダーシップ

雑S五二〇七 稲田淳 オウム真理教事件の研究——オウムと戦後日本の物語——

雑S五二〇八 乾聡 社会問題化する子どももののいじめについて——マスコミ報道のあり方をめぐって——

雑S五二〇九 岩田真由美 「地域福祉とNPOの課題——介護保険をめぐって——」

雑S五二一〇 魚住佑美 スポーツと地域社会——浦和レッズと地域の人々との関係——

雑S五二二三 牛島大樹 高齢社会とその福祉のあり方——介護保険制度の施行を控えて——

雑S五二三四 大橋一将 高度情報化社会におけるコミュニケーション——インターネットコミュニケーション——

雑S五二二五 大山香織 情報化社会におけるコミュニケーション——流言とコミュニケーション——

雑S五二二六 小野浩子 対人距離における快・不快感

雑S五二二七 小原直美 中学生の生活と友人関係の形成

加藤 亮 人を好きになる心理——好意と恋愛感情について——

西久保 明 男 流行の心理——現代人の価値基準とアイデンティティの構築——

川角 剛 史 流行をもたらす要因についての研究

早野 智 子 これからの母性を考える

小宮 崇 照 郷土アイデンティティ形成と高校野球甲子園大会の関係

平林 由 江 コミュニケーションの限界

酒井 朗 ユーモアとコミュニケーション

藤 井 敦 志 行政・住民・企業の環境問題における関係のあり方、解決のあり方

佐藤 さおり 情報社会をどう生きるか

藤 田 智 子 アダルトチルドレンの成立過程とその対処について

杉里 美 香 死刑制度の社会的機能

馬 路 和 人 集団タイプとリーダーシップの関係

竹内 直 孝 軍隊と社会

松 岡 智 子 家庭における「食」の機能

津 坂 等 体罰の有効性

松 下 幸 弘 日本型少子社会の問題について

中 防 健 二 自動車産業からみるグローバルゼーション論——グローバルゼーションとローカリゼーションの最適ミックス——

松 田 真 澄 日本人の同調行動

中 森 洋 平 都市社会の変容と政策の展開——東京都を中心として——

山 内 龍 也 知識偏向型人間における小集団化についての考察

中 山 武 ギャンブルをする者の心理——人はなぜギャンブルをするのか?——

北 澤 文 子 世代間における羞恥心の差異

永田 卓 己 犯罪に至る発達心理学——正當な価値観を任わすもの——

深 谷 昌 代 現代社会と音楽

伊 藤 理 絵 メディア・リテラシーと人格形成

石 原 由 貴 服装——ファッション——における

史学科

日本史専修

る流行

芸S五〇九 今井孝司 流行の根拠  
芸S五三三 鋤柄雅子 静かな異文化接触

芸H六〇五 永田真規 中世の被差別民  
芸H六〇六 西村明子 北条政子の政治権力とその背景  
芸H六〇七 野口悦代 中世武家政治における妻と後家の役割——豊臣秀吉をめぐって——

芸H六〇一 池田弥生 長屋王の変に関する一考察  
芸H六〇四 今井ひとみ 松本奎堂生誕地碑建碑について

芸H六〇八 八田浩孝 武田氏の権力構造について——国人領主との関係を中心——

芸H六〇六 植田麻友美 聖武天皇論

芸H六〇三〇 早川秀幸 古代の対外関係史

芸H六〇七 大島喜典 中世における塩座の研究  
芸H六〇九 小田原弘貴 信長・光秀・本能寺

芸H六〇三 福沢享紀 中世武家政権の朝廷政策  
芸H六〇三 松原裕美 『美濃国遠山荘、加藤遠山氏について』

芸H六〇二 河合保幸 今川氏檢地論

芸H六〇三 三嶋英樹 中世村落における宮座と祭祀  
芸H六〇三 藏重賢司 日本古代の交通制度について

芸H六〇三 岸本崇二 仲麻呂政権に関する一考察  
芸H六〇五 斉藤真樹 遠州地方における井伊氏と今川氏の関係について

芸H六〇四 山野博樹 隼人に関する一考察  
芸H六〇五 寺田晴香 齊藤信幸について

芸H六〇六 白井宏枝 佐野蓬宇について

芸H六〇六 三浦さや香 古代の信濃について——牧を中心として——

芸H六〇七 菅谷幸子 女帝の研究  
芸H六〇九 田中良典 鎌倉幕府の弓始について

芸H六〇七 田上浩子 美濃守護土岐氏と奉公衆土岐氏

芸H六〇〇 辻敬雄 勲位制の研究  
芸H六〇三 津田智子 長岡京遷都をめぐる一考察  
芸H六〇四 中西美佳 初期足利政権について——二

芸H六〇八 浪崎淑子 防人について  
芸H六〇九 下 さとこ 藤原仲麻呂について

癸H六〇二 浅井優介 古代の葬制

癸H六〇五 伊藤博 武田信玄の治水事業について

癸H六〇八 戸村俊人 三河国八名郡大野村における年貢の変遷

癸H六〇九 廣瀬亮一 堀越公方について

東洋史専修

癸H六〇一 青木雅憲 リカルテ將軍と日本軍政

癸H六〇三 秋田建生 李鴻章による北洋海軍設立の財源——釐金の徴収方法をめぐって——

癸H六〇三 安藤亜希子 ラビンドナラトータゴールの世界観

癸H六〇四 石井隆生 マレーシアの国家形成における1969年「5月13日事件」の意味

癸H六〇五 石濱悠 インド国民会議派のセキユラリズムについて

癸H六〇六 内村直人 明代沿海地域の防衛について

癸H六〇六 大橋史明 漢武帝の泰山における封禪について

癸H六〇〇 小藤浩美 元代の帝師について

癸H六二二 古西太郎 清代綠營兵制の変遷

癸H六二三 小浜真城 パキスタン独立運動における

ラホール決議の意味

癸H六二三 後藤美貴 敦煌「社文書」からみる仏教の民衆化について

癸H六二四 里美奈美 イザベラ・バードのアジア観について

癸H六二五 鈴木啓泰 范仲淹の西北経営について

癸H六二六 田中隆博 明代、潘李馴の河工について

癸H六二七 柘植由紀子 魏晋における五石散の流行についての一考察

癸H六二八 藤後ゆき モンゴル革命に関する一考察

癸H六二九 西村俊之 ビルマ独立運動と「南機関」

癸H六三三 長谷川健司 元末明初の江南商人の活動について

癸H六三六 丸山剛 「汪兆銘政権の性格とその意義について」

癸H六三七 宮嶋徹 北宋慶曆年間における手形制度について

癸H六三〇 芳林正悟 義和団事変の性格——武術集団について——

癸H六三三 米田宙生 明末農民反乱の性格について

癸H六〇三 春日井祐史 シンガポールの国民形成——第二次世界大戦期の中国人社会を中心に——

尙H六二二 竹内 哲 元朝文化政策における耶律楚材の影響

尙H六三三 長瀬 美智代 新羅花郎についての一考察

尙H六三五 玉屋 志門 ビルマにおけるマイノリティのキリスト教改宗に関する一考察——カレン人の事例を中心に——

尙H六三三 伊藤 義則 岡崎市街地の都市的諸機能の分布と変遷過程

尙H六三三 赤木 孝道 東三河地方における中心地システムの研究

尙H六三〇 町村 善孝 南宋初期の明受の兵変

尙H六二五 平野 忠 胡朝滅亡に関する一考察

尙H六〇二 赤木 孝道 東三河地方における中心地システムの研究

尙H六〇三 大須賀 俊樹 愛知県幸田町における近代初期の土地利用

尙H六〇五 金子 奈緒美 桃花台ニュータウンにおける居住環境の研究

尙H六〇七 坂倉 宏佳 安城における農耕景観とその変化——安城市高棚町の事例——

尙H六〇九 鈴木 秀紀 岐阜県海津町における輪中景観の変貌

尙H六一一 田口 依子 浜松地域テクノポリス政策の

尙H六三三 堤 教行 展開と課題  
京都市における訪日外国人観光客の観光ルート

尙H六三四 仲 由一郎 買物行動にみる商業環境の変化（福岡県久留米市を例に）

尙H六三六 古田 広美 豊橋駅前商店街の変化

尙H六三七 堀 充揮 野沢温泉の地域的特性と季節的特性

尙H六三八 前島 久恵 愛知県豊根村における近代初期の土地利用

尙H六三九 前野 正憲 木曾川流域における水道料金

尙H六三〇 松元 秀憲 地域格差について

尙H六三三 山田 美紗都 中心商業地区におけるアーケードの形成・発達と空洞化の現状

尙H六三三 坂本 隆雄 歴史的街並み保存地区における住民意識と地域特性

尙H六三四 伊藤 芳樹 名市における（  
屋市四地区の例

尙H六三九 渡辺 隆也 県民性の地域的差異について

公園の発達と地域的差異（桑名市における）

愛知県阿久比町における近代初期の土地利用

文学科

日本語日本文学専修

- 古今集に詠まれた桜  
 源氏物語における「泣く」について  
 『今昔物語集』の女性について  
 『山月記』論  
 「金閣寺」——「私」と周辺人物の関係から——  
 『雨月物語』——吉備津の笠——研究  
 「のんきな患者」論  
 平安時代の女性の出家——源氏物語を中心に——  
 『源氏物語』六条御息所の研究——形容表現を中心に——  
 「硝子戸の中」論  
 源氏物語の本文の研究——うちとけてもの思ひ騒げるけはひ（紅葉賀）について——  
 「ヴィヨンの妻」論  
 「金閣寺」考察
- 隅本和子  
 『源氏物語』における「はなやか」について——「あざやか」「げざやか」との比較を中心に——  
 竹取物語研究——古代の月のイメージ——  
 手嶋百合子  
 『吾輩は猫である』論  
 『雨月物語』の研究  
 富田論史  
 『雨月物語』の研究  
 内藤敦子  
 竹取物語研究  
 中島大介  
 『今昔物語集』研究——怪婚譚を中心に——  
 中村大輔  
 『徒然草』の研究  
 中山啓太  
 『八犬伝』の構想——水滸伝との関係——  
 西尾彩  
 源氏物語における朧月夜の人物造型  
 野尻有紀  
 夏目漱石「こころ」研究  
 原田実佳  
 『伊勢物語』研究——編次者の意図をめぐって——  
 久田香苗  
 『蜻蛉日記』における婚姻  
 樋野順子  
 『落窪物語』——あこぎの存在について——  
 松浦由美  
 『源氏物語』における「なよな
- 日本語日本文学専修  
 浅井奈々  
 大竹園美  
 岡田亜樹  
 岡田 悟  
 織田 徹平  
 角屋 めぐみ  
 加藤 雄三  
 加藤 由実  
 川 澄 幸代  
 河村 晶子  
 川村 景子  
 小嶋 一輝  
 鈴木宏聡
- 雑七〇一  
 雑七〇四  
 雑七〇五  
 雑七〇六  
 雑七〇七  
 雑七〇八  
 雑七〇九  
 雑七一〇  
 雑七一一  
 雑七一二  
 雑七一三  
 雑七一三  
 雑七一三  
 雑七一八

英語英文学専修

よと」「やははと」「たをたを」とについて

巻七七〇 宮本香織 『南総里美八犬伝』研究——犬坂毛野胤智を中心に

巻七七〇 村上亜希 竹取物語研究

巻七七〇 森千紗 『福富草紙』について

巻七七〇 諸戸高志 『李陵』論

巻七七〇 藪崎景 『東海道中膝栗毛』研究

巻七七〇 山本恭子 継子物語研究

巻七七〇 吉田香奈江 『源氏物語』研究——浮舟を中心に——

巻七七〇 吉田高寛 『三四郎』論

巻七七〇 渡利雅子 夏目漱石「ころ」論

巻七七〇 高木宏幸 『古都』論

巻七七〇 松本久美 『源氏物語』における「夢」について

巻七七〇 手塚恭子 『源氏物語』における「宮」「后」「後の宮」について

巻七七〇 北川由貴 川端康成『雪国』論

巻七七〇 大島彩 『桜の森の満開の下』論

巻七七〇 原田幹子 『銀河鉄道の夜』論

巻七七〇 安藤真弓 『とりかへばや物語』研究

巻七七〇 西川文貴 太宰治「人間失格」論

巻七二〇 阿部友絵 A Study of Hamlet

巻七二〇 飯島有美子 Lord of the Flies 論

巻七二〇 石黒伸幸 Lord of the Flies 論

巻七二〇 伊藤絢子 Thomas Hardy 論

巻七二〇 伊藤紀久美 James Joyce 論

巻七二〇 大内みどり 『オセロー』研究

巻七二〇 大嶽留美 『リア王』研究

巻七二〇 大原慶子 『マクベス』研究

巻七二〇 小野田紗織 A Comparative Study of the Meanings in Modal Auxiliary Verbs

巻七二〇 飼沼裕司 A Study of the English Main Verbs

巻七二〇 梶原知子 Katherine Mansfield 論

巻七二〇 河合昭美 JAMES JOYCE 論

巻七二〇 河合昭美 Dubliners に見る変化と象徴

巻七二〇 河田礼子 Thomas Hardy 論

巻七二〇 鬼頭尚江 『ハムレット』研究

巻七二〇 久保田由起 『オセロー』研究

巻七二〇 小久保真弓 『ハムレット』研究

巻七二〇 小林絢子 『ハムレット』研究

巻七二〇 榊原加奈 シェイクスピア研究 Othello

——イアーゴの性格・悪意・行動について——

衆七三三 佐野 比呂美 James Joyce 論

衆七三三 杉田 墨 *Othello* 研究

衆七三三 杉村 素子 A Study of *Romeo and Juliet*

*Romeo and Juliet* 研究

衆七三五 鈴木 正樹 A Study of *Macbeth*

衆七三六 高須 慎治 A Study of Middle English

衆七三六 田中 裕子 『ハムレット』研究

衆七三〇 中村 聖子 『オセロー』研究

衆七三三 中村 友香 James Joyce の *Dubliners* にこころ

衆七三三 永野 美佳 VIRGINIA WOOLF 論——To the *Lighthouse* にこころ——

衆七三三 難波 おさ A Study of Future——Time Expressions

衆七三三 南場 里香 『じゃじゃ馬ならし』研究

衆七三五 新原 由己 フォークナー著 『八月の光』におけるリーナの意味

衆七三五 福田 友希 Virginia Woolf の *Mrs. Dalloway* にこころ

衆七三七 藤本 早苗 J・D・サルンジャー『ライ

衆七三六 蒔田 園子 『オセロー』研究——オセローの光と闇——

衆七四〇 皆木 利依子 A Study of English Dialects

——In Grammar and Phonology——

衆七四三 山村 育代 トニ・モリスンの作品研究

衆七四三 吉川 美由紀 Culture Gaps between English and Japanese

衆七四四 吉田 真紀 Katherine Mansfield

衆七四四 韓 雪梅 Sense of Time in Shakespeare's Sonnets

衆七四六 室 晶子 English Education——The Value of Communication——

衆七四六 飯田 陽子 English Pragmatics——The Reason That Indirect Speech Acts Are Needed——

衆七四六 森 裕美 Virginia Woolf——To the *Lighthouse* にこころ

衆七五〇 深谷 涼子 Differences between British and American Pronunciation

衆七五五 原 章子 ウィリアム・フォークナーの

衆七五五 藤本 早苗 J・D・サルンジャー『ライ

衆七五五 福田 友希 Virginia Woolf の *Mrs. Dalloway* にこころ

衆七五五 藤本 早苗 J・D・サルンジャー『ライ

衆七五五 藤本 早苗 J・D・サルンジャー『ライ

衆七五五 藤本 早苗 J・D・サルンジャー『ライ

衆七五五 藤本 早苗 J・D・サルンジャー『ライ

衆七五五 藤本 早苗 J・D・サルンジャー『ライ

衆七五五 藤本 早苗 J・D・サルンジャー『ライ

衆七五五 藤本 早苗 J・D・サルンジャー『ライ



『乾燥の九月』に見られるコミュニティと社会規範について

巻七二八 栗田 昇

巻七三三 西園 大輔 How Can We Improve the English Ability?

English Ability?

巻七三七 竹内 浩

A Midsummer Night's Dream 研究

ドイツ語ドイツ文学専修

巻七〇一 浅野 良子 リンゲルナッツについて

巻七〇二 安藤 峰子 グリム兄弟——その人と作品について——

巻七〇三 猪飼 美和子 ヴィルヘルム・ハウフとその作品

巻七〇四 尾崎 裕美 ゲーテについて

巻七〇五 川上 恵美子 ミヒヤエル・エンデ「はてしない物語」について

巻七〇六 河原 愛 ケストナーの生涯とその作品について

巻七〇七 栗木 佳子 ヘルマン・ヘッセ「デミアン」について

巻七〇八 清水 亜紀子 ヘルマン・ヘッセ「郷愁」について

巻七三〇 鈴木 智香子 Brecht『三文オペラ』について

巻七三一 高木 良枝 メーリケの詩について

巻七三二 柘植 英華 劇作家ブレヒトと「セチュアンの善人」について

巻七三四 寺田 恵美 ミヒヤエル・エンデとモモについて

巻七三五 豊岡 真由 シュトルム「海の彼方より」について

巻七三六 中村 裕子 トーマス・マン「トニオ・クレイガー」について

巻七三七 名倉 陽子 ベートーヴェン「第九交響曲」について

巻七三八 服部 香奈美 ゲーテとその作品「ヘルマンとドロテア」について

巻七三九 三品 佳世 シヤミツソーの「影をなくした男」について

巻七四〇 渡邊 優子 カフカ「変身」について

巻七四一 久田 麻祐子 ヘルマン・ヘッセ「車輪の下」

巻七四二 杉本 真里 トーマス・マン『魔の山』——ハンス・カストルプの魂の成長——

巻七四三 加藤 明子 H. HESSE, ROSSHALDE

(湖畔の家) を読んで

壺し七三七 坂本香代 フランツ・カフカ「変身」を  
読んで

壺し七三三 辻 俊輔 「ドイツ中世から近世におけ  
る刑吏について」

壺し七三六 今泉 久美子 ゲーテ「若きウエルテルの悩  
み」

フランス語フランス文学専修

壺し七〇一 伊藤 心平 人間性の統御の方法、モン  
テーニュとマルクスIIアウレ  
リウス

壺し七〇二 伊藤 久史 「美女と野獣」にみるポーモン  
夫人の児童文学の意味

壺し七〇二 小田 俊彦 綴字法から見たフランスの言  
語政策

壺し七〇四 加賀城 可奈 世界のテニス大会における  
ローランギャロスの位置につ  
いて

壺し七〇五 加古 量子 香水のネーミングに見る言語  
意識調査

壺し七〇六 加藤 安曇 お菓子のレシピにおけるフラ  
ンス語語法研究

壺し七〇七 金原直史 異種媒体間におけるアナロ

壺し七〇八 栗本 真巳子

ジーと差異  
日・仏における小売業戦略に  
ついて

壺し七〇九 齋藤 里奈

アルペール・カミュの『異邦  
人』について

壺し七一〇 塚本 弓子

語彙論研究——日仏ホロスコー  
プの語彙を中心として

壺し七一一 月足 亜紀子

言葉遊びについて——日・仏  
における言葉と笑いの関係——

壺し七一二 殿林 みすず

植物名称を用いたフランス語  
の表現について

壺し七一三 内藤 雅美

マリー・アントワネットとフ  
ランス革命の女性たちについ  
て

壺し七一四 中田 俊子

日・米・仏の映画における動  
きの比較研究

壺し七一五 野呂 直子

パリのメトロ駅名比較研究  
『恐るべき子どもたち』におけ  
る登場人物研究

壺し七一七 林 陽子

ゴーチエの舞踊評論を通して  
ロマンティック・バレエを考  
察する

壺し七一八 平瀬 正美

ゴーチエの舞踊評論を通して  
ロマンティック・バレエを考  
察する

壺し七二〇 前川 明子

日・仏の若年層におけるダイ

エッセイ意識の調査研究

18世紀のフランスの医療

サガンの作品『逃げ道』における作中人物の性格設定について

果実から見たフランス文化史

擬音語・擬態語の日仏比較研究

フランスの「通り」の名称研究

シモーヌ・ド・ポヴォワールの『おだやかな死』について

アレクサンドル・デュマの小説『モンテ・クリスト伯』について

中国語中国文学専修

中国人の生活文化——養生法をめぐって——

林語堂論

蜀漢政權——劉備と諸葛亮の組織——

宋家の三姉妹とその時代

齊の桓公

中国における「時代背景と姓

名——文化と姓名のつながり——

「意」と「書」と「言」——先秦時代の「側面」——

老舎とその作品『離婚』

笑話について

中国の神話と伝説

『聊齋志異』の動物譚

『聊齋志異』と日本文学——芥川龍之介を中心として——

駱駝祥子・言語的特徴

聊齋志異と狐

唐代後宮の装身法

中国における花の名前

中国におけるイスラム教

小説にみる日中文化比較論

文化大革命後の創作者たち

傷痕文学と劉心武——

## 『リア王』研究——シェイクスピアの理想のフール像——

九六七七—〇七 大嶽留美

シェイクスピア劇のいくつかには、喜劇・悲劇とわず、道化が登場する。道化と言えば、滑稽な言動で人々を楽しませる人、みな笑いのもの、というイメージしかなかった。しかしそれはある一面にすぎず、もう一つの顔を隠し持っていた。シェイクスピアは、道化の性質を十分理解し、彼らを劇の中で効果的に使っている。シェイクスピア劇の中で、最も主人公と深くかかわっており、重要な役割を果たしているという、『リア王』のフールに焦点を合わせ、その劇中の役割・性質から、シェイクスピアの理想のフール像を明らかにしていきたいと思う。

まずは道化の歴史をさぐることから始めよう。道化の起源はローマ帝国時代にあった。道化は時代背景を反映し、時代の推移に合わせて、変わり続けた。道化は生き残るために、*'sly fool'* と *'stuffy fool'* —— 笑うものと笑われるものを演じなければならなかった。この相反するものの融合により、道化は二面性を持つようになったのだ。

次はリアのフール自体に迫っていこう。彼は浅薄な利口

さ、気のきいた即答の才、的を得た批判、宮廷道化に必要な才能を身につけていた。己の愚かさを知っていたし、真実を見極める力も持っていた。そんな賢い道化がなぜ何もかも失ってしまったリアについていったのか？ それは彼が自分の損得より、人の気持ちを優先させたからだ。そしてもう一つ、リアを真実へと導いていく、という重要な役割をまかされているからだ。フールはリアの愚かさを風刺し続けた。リアを狂気の世界へ追いやることになって、風刺をやめなかった。リアを信じていたからこそ、そうしたので。そしてその期待どおり、リアは新たな誕生を迎えることになる。フールはそれを見とどけて、自分の役目は終わったとばかりに消えていく。これがフールが劇の途中で消えてしまった理由である。また別の見方をすると、道化は本来主人公の影の役割も果たすが、リア自身が阿呆となった以上、フールはその役目を奪われ、用なしとなり退場せざるをえなかった、とも考えられる。

消えてしまったフールの行方は？ というところまでい

リアとの一体化説が考えられる。彼らはともに純粹な心の持ち主であり、リアにとつて、二人は眞実そのものと言えよう。

リアのフールは、シェイクスピアの理想のフール像そのものであつた。眞実を見る賢い愚者であり、風刺によつて世の中の間違いを正してゆく。鋭い風刺、批判であつても、その言葉にはあたたかさが感じられる。また、フールは人間の愚かさ・弱さを知つていて、そんな人間に絶望することなく、眞実へと導いていこうとする。時には弱き者の代弁者となり、その結果自分の身が危険になるとしても、それをやめない。しかも何の見返りも期待などしていないのだ。人々に眞実を伝え、笑いと幸福をもたらす、それが完成された理想のフール像だ。

シェイクスピアがフールを通して言いたかつたことは、世の中の不条理なことに対する批判や、世の中に自分が愚かであると感じていない者たちがなんと多いことだろう、という嘆き、そして眞実を見出すためになすべきこととは？ などではないだろうか。

リアはフールの風刺によつて、新しい認識に達することができた。その人のための思ふなら、例えつらい言葉であつても、本當の事を言うべきである。それが人間の成長を促すものとなるのだ。また私たちは人間の愚かさを認め、身につけた虚飾を捨て、ありのままの姿をさらけ出す勇氣を

持つべきである。そのようにして初めて、眞実が見えてくるのだ。

道化は眞実を見る目を持ち、眞実を語る勇氣と知恵を持つ。そして何より暖かい心を持つている。フールの精神は、私たちが忘れかけているものではないだろうか。道化の私たちは変わろうとも、そのフールの精神は、いつまでも生き続けることを望む。

## 擬音語・擬態語の日仏比較研究

九六七七三二五 兼松裕子

現在、フランスにはたたくさんの日本文化が伝わっている。中でも日本のゲーム・マンガなどは、世界でトップレベルを誇っており、フランスに限らず世界中に広がっている。

実際、フランスでは日本のアニメがたたくさん放送され、フランスのアニメ・ゲーム雑誌には、〈JAPON〉というコーナーが設けられ、日本のアニメ・ゲームの最新情報が数多く紹介されている。

本屋にもたたくさんの日本のマンガが〈MANGA〉という名前で翻訳され、売られている。忠実に訳されているものあれば、文化の違いで理解しにくいものは、独自にアレンジされて訳されているものもある。

翻訳作業の中で重要な位置を占めているのが、「擬音語・擬態語」だ。日本語は他の言語の中でも擬音語・擬態語が多い言語で、これらを状況によって描き分け、そのマンガにリアリティを持たせる効果がある。この擬音語・擬態語、フランス語ではどのように使われているのか、訳されているのかを以下の方法で調べた。

フランスの擬音語・擬態語についての資料が見つからなかったため、独自のデータを製作した。この論文で扱ったのは、擬音語・擬態語が多く使われている *What's Michael?* と *Dragon Ball* の二冊の代表的な日本のマンガだ。

これらの本で同じ部分に使われている日本語版、フランス語版の各擬音語・擬態語を全て抜き出し、仏和辞書、仏和辞書を用いてその言葉が辞書にあるのか、どのような状況だと説明しているのかを調べ、データを製作した。

*What's Michael?* の一例を示すと、主人公は猫なので鳴き声が多く入っている。日本語版の鳴き声は多彩で、鳴き方を描き分けることで、猫の感情をよりリアルに表しているが、フランス語版の鳴き声は、*“MIAA”*、*“MIAAH”*、*“MIAOUIH”* の三語でほぼ統一されていた。

猫の鳴き声が描かれていた部分は全部で八十七箇所、一番多く使われていたものは、*“MIAA”* の五十七箇所だが、辞書は *“MIAOUIH”* のみの表記だった。しかし、辞書に載っているままの言葉を使っている部分はなく、近いもので

“MIAOUIH” というものだった。

子猫の声は、日本語版で大人は  $\text{ミャウ}$ 、音、子供は  $\text{ミャウ}$ 、音と違いをつけ、独特のかわいらしさを表しているが、フランス語版は違いがなく、上に挙げた三語だけで表されていた。間の  $\text{ミャウ}$  の数を増減しているようだが、特に目立った変化は見られない。

猫が発情期の時に出す独特の声も、日本語版では甘く、伸びのある鳴き方をすることが表されているが、フランス語版では成猫も子猫も、怒りの声も甘えの声も同じ言葉が使われていた。

全体的に見ると、擬音語・擬態語の種類の高さは日本語が圧倒的だ。日本人は、物音を周りの状況などによって聞き分け、細かく表現している。What's Michael? といえは成猫、子猫の鳴き方、怒り、甘えの声など、絵がなくても状況をほぼ理解することができる。これが日本のマンガが発展する大きな要因になっていたのは間違いない。

一方、フランス語は日本語と比べると擬音語・擬態語の種類が少ない。その原因として、日本人のように会話中に擬音語・擬態語を入れて話す、ということあまりしないからであろう。日本人は、老若男女問わず会話の中で自分が伝えたいことを相手にわかりやすくするため擬音語・擬態語を混ぜて話す、という特徴がある。これが日本語の擬音語・擬態語が発展した一つの原因と考えている。

今ではあまり重要視されていないが、翻訳に限界がある擬音語・擬態語だが、日本のマンガがもっとフランスに入り翻訳されることで発達するであろう。そうすればもっと身近に感じ、面白さをより多くの世界の人々に味わってもらえるはずだ。

